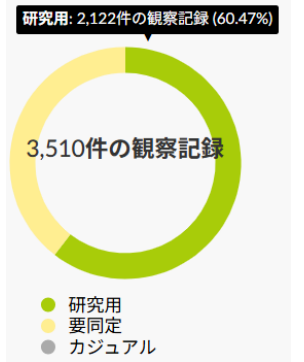


村山史世（地域環境政策）・新田梢（フィールド科学）・榎本好二（客員教授）

研究の背景

- ・米国の非営利団体が運営する生物多様性情報のオンライン・ソーシャル・ネットワークであるiNaturalistでは、画像や音声データ付きの観察記録に複数の登録ユーザーが種の同定に同意すれば研究用グレードの観察記録としてGBIF（地球規模生物多様性情報機構）のオカレンスデータに登録される。
- ・iNaturalistを活用した都市対抗の世界同時一斉生きもの調査である「シティ・ネイチャー・チャレンジ2026」に、麻布大学は相模原市等と連携して「シティ・ネイチャー・チャレンジ2026神奈川県県央地区（CNC）」を組織して参加した。
- ・シティ・ネイチャー・チャレンジ2026神奈川県県央地区では、4月24日から27日までの4日間に県央地区の6市1町1村をエリアでiNaturalistを生きもの観察記録を収集した。その一環として5月9日（土）には、麻布大学と相模原市立博物館で「生きもの同定会」を実施した。その結果、864種3,510件の観察記録のうち、研究用グレードは60.47%・2,122件となった。ただし、画像や音声データだけでは同定できない観察記録も残っている。
- ・生きもの同定会では、相模原市立博物館の学芸員や麻布大学の研究者が、一般市民と同じテーブルで同定をつた。生きもの同定会は、学芸員や研究者といった専門家が同定しやすい観察記録としにくい観察記録があること、そして、同定しやすい観察記録を生成するには、コツと技術が必要であることが明らかになった。



アプローチ

- ・本研究では、専門家や研究者がで同定しやすい観察記録の取得方法を開発し、一般市民の生きもの観察記録が良質なオカレンスデータとなる方法を博物館や行政・市民団体と協働して開発する。
- ・シティ・ネイチャー・チャレンジ2027において社会実装する。



期待される結果

- ・一般市民が「同定しやすい生きもの観察記録」の技法を修得することで、1) 地域の生物多様性情報を品質の高いデータとして生成できるようになる、2) 地域の生物多様性の現状を把握することで、ネイチャーポジティブにむけた方策を構想できる。



募集方法

- ・野生の動植物・菌類の観察記録を生成することに興味がある人
 - ・アプリやパソコンなどのデジタルデバイスを使うことが好きな人
 - ・GISやデータ処理、生物多様性情報に興味がある人
 - ・博物館や相模原市・神奈川県などとの連携・協働に興味がある人
- を歓迎します。

